

無根のナショナリズムと竹内好再考

加々美 光行 氏

〈愛知大学国際中国学研究センター所長・COE 拠点リーダー〉



2日間どうもありがとうございました。私が最後のトリというには面映いのですが、少し挑発的な話をさせていただきます。というのは、これまで皆さん仲良しこよしではありませんが、お互いに褒め合うことはあっても、けなすことはほとんどありませんでした。そういうシンポジウムはつまらないというのが私の考えですので、少しは火花を散らして欲しいと。このあとの自由討論では、ぜひ私の横っ面を少しだけはって、腫らしていただくような、そういう話に沿って火花を散らしていただければと思います。

このシンポジウムを計画したのは、竹内好が流行であるからではありません。現在は、流行とはまったく反対です。最初に、このシンポジウムの冒頭で少し趣旨をご説明申し上げたように、「アジア主義」あるいは「東アジア共同体」ということが多く語られるようになったにもかかわらず、むしろかえって竹内好の出した問題は忘れられつつあるという、あるいは忘却されつつあるという危機感が私にありました。それゆえに、このシンポジウムを提案したわけです。

1977年に竹内好が亡くなって以来、「竹内好の問い」は、どんどん薄れてきていたというのが私の率直な感覚です。この点は松本さんの感覚とだいぶずれているように思います。

1つは中国で大規模な改革・開放が始まり、そ

の意味では竹内が方法的に託した中国は、もはや欧米近代に対する「抵抗のアジア」「抵抗の中国」ではなくなったという認識が、明確に語られることのないままに定着しつつありました。それゆえに、「なんだ、結局、中国は日本のあとを追いかけてきているのではないか。おまけに日本を追い越すことになるかもしれない」と。いずれにしても、簡単に言えば、今まで考えていた中国は、つまり竹内が出したような問いとしての中国は、もはや夢に過ぎないという感覚が一般的に広く定着したと、私は思っています。

一昨年、ドイツのハイデルベルグで竹内好に関する国際シンポジウムが開催されました。私と孫歌さん、松本健一さん、そして岡山さん、この4人がそのときに参加したメンバーです。そのとき、私も松本さんと同様に最初は「なぜドイツか」という気持ちを持ちました。

しかし、ドイツに赴いて、シンポジウムに参加するうちに「そうか、ドイツだからだ」ということに思いが至りました。それは先ほど松本さんが言ったヨーロッパ主義に由来する、という観点とは少し違います。もちろん、私は同じような論点を、『東アジア共同体を設計する』（日本経済評論社、2006年6月）という本のなかで、松本さんが少し触れたのと同じようなことを別の角度から書いています。これはあまり皆さんの目にふれな

い最近出たばかりの本です。いずれにしても私がドイツで感じたものはそれとは別です。

つまり物質的な近代化。簡単に言うと、18、19世紀を境にヨーロッパとアジアが出会う。その出会いによって、ヨーロッパはアジアを対象化し、かつ東洋として意識しつつ、あるいはその裏返しとして、西洋としての自己意識をつくりだす。そして西洋自身が西洋という自己意識を持ち、また同時にアジアに東洋という自己意識を受け身的に植え付けました。そういう歴史から始まり、明治維新を経て、戦後、近代を歩んできたわけです。この点に関連して私は、先ほど松本さんが語られたこととはまったく逆の感想を持っています。

どこが逆かと言うと、アジアの評価にかかわるものです。60年代から70年代にかけてアジアは貧しく貧困、独裁であるというマイナス的なイメージであったと、先ほど松本さんが言われました。それは確かに、戦後日本が1950年代後半期から1960年代にかけてある変化を遂げるまでの、50年代前半までの段階ではそうであったかもしれません。

竹内はむろん敗戦直後から亡くなる70年代まで一貫してアジアの評価をそのようにマイナスイメージでは見ていませんでした。しかしながら、むしろ戦前戦中の日本人のアジア観というものについていえば、確かにマイナスイメージであったかもしれません。

1955年のバンドン会議（アジア・アフリカ会議）の時期。私はその当時まだ中学生だったように思います。兄の影響を受けてアジアに妙な関心を抱くようになっていました。そのバンドン会議の衝撃は、少年から青年になる私にとっては非常に強い衝撃でした。「アジアの夜明け、ついに暗黒の時代から夜明けの時代を迎えるようになったのだ」というバンドンの声明は、私のような世代の少年すらも心振るわせられたのです。

それ以降、先ほど松本さんが言われた1960年の17カ国のアフリカ諸国が独立を遂げ、第2回

のアフリカ会議が開かれることを非常に強く切望しました。確かに一瞬陰りがありました。1960年を境として「中印国境紛争」が起きたからです。中国とインドというバンドン会議をリードした二国が軍事紛争をも引き起こすような対立関係に至ったときにアジアに対するプラスイメージは、やはり持てないのかという一瞬の当惑が、私などにもありました。

しかしながら、ベトナム戦争を1つの契機として、ここにおられる鶴見俊輔さん、私の大先輩で友人でもある市井三郎さんもそうでしたが、皆さん、あの世代の方々が、「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）をつくり、そして、反米ベトナム反戦というかたちを取って、もう一度アジアのイメージは活性化しました。

その意味では、アジアは「抵抗のアジア」として、文字どおり竹内が示したようなものではないのかということ、私は高校2年、3年ぐらいから大学生にかけて、まだ竹内を知らずにいた時期から既にアジアを事実上「抵抗のアジア」としてとらえるようになっていたように思います。大学に入って竹内を読むようになってから、「そうだ、そのとおりだ」というふうに感じ、文字どおり腑に落ちるかたちで「抵抗のアジア」に夢を見るようになった世代です。

では、なぜ竹内が、ベトナムに、あるいは中国に、あるいは文化大革命、毛沢東にまで、昨日の菅さんの言い方でいえば、魯迅から毛沢東へと言説が移る、同じ抵抗の中国、抵抗のアジアを、魯迅という文学者から、政治家であり革命家である毛沢東にその視点を移していったか。そこに非政治から政治をうつという、非政治の世界である文学者として「無」としての存在から、政治という具体相を伴う政治というものをうつという方法的な態度が崩れたのではないかと、菅さんが言われました。簡単に言うと、竹内は、孫文と毛沢東を媒介する中間項に魯迅を置くようになったと言われました。

その指摘は確かに当たっている部分があります。しかし自分自身に引き寄せて言わせていただければ、毛沢東の中国、文化大革命の中国が、欧米近代化に対する強い抵抗として現れたという、ですからバンドン会議に示された抵抗のアジア、それはやはり毛沢東の中国のなかにも見てとれるでしょう。またそれは文化大革命の中国のなかにすら見てとれるというように当時私などは考えました。また、多くの人たちがまたそう考えたのではないかと思います。

そのような認識が果たして具体相のレベルで正しかったのかと、こんにち言われれば、文化大革命、悲惨な現実を結果していたということを当時はまだ知らずにいました。また、毛沢東の中に単にそうあるに違いないと思って描いた抵抗のアジア、しかしそれは抵抗の中国を象徴するだけの存在ではありませんでした。具体相としてはもっと生々しい、そして暗いものを持った政治家として毛沢東が存在していたということをやがて知ることになるわけです。

にもかかわらず、私は薜毅さんと同じですが、むしろ克明に文化大革命の実態を研究した者として、なおかつ今でも文化大革命を全面否定しきれません。なぜ、できないかという、問題として出された問いそれは残されているということですから。最初に申しましたように、1960年代に私のようなちっぽけな存在も含めて、多くの人たちが問うたのは、戦後、近代の日本が何をもたらしたのか、水俣をもたらし、四大公害をもたらし、そして薬害や医療過誤をもたらし、教育の荒廃をもたらし、政治の腐敗ももたらし、もちろん貧富の格差も1960年代は非常に激しいものがありました。当時篠原三代平が明らかにした日本社会の二重構造論といったようなものが、かなり経済学的にも議論を呼びましたが、そうしたものへの怒りを感じた世代として言えば、その問いは今現在どうなったのでしょうか。解決されているものがどれだけあるのかという問題があるわけです。にも

かかわらず具体相としての毛沢東、革命家としての毛沢東、あるいは具体的な権力闘争としての文化大革命がもたらした生々しい現実というものはこちらに明確にあります。

問題は、既に昨日もたびたび議論があったことですが、態度としてのアジア、態度としての中国、方法としての中国、方法としてのアジアと言うときに、最も重要なポイントは具体相としては期待しては裏切られ続けるということ、しかもそれに甘んじるという姿勢、そうした在り方をドレイと魯迅は呼んだのですが、そのドレイ的あり方を魯迅もまた竹内も否定します。これは、フランツ・ファノン (Frantz Omar Fanon) が『地に呪われた者』のなかで1960年に語ったことでもあります。多くのアジアの知的な、未来を展望する知的な人々は、欧米近代に学ぼうとしました。その学ぼうとした先生が、武力を持って、武器を持って学ぼうとするものを威嚇しかつ侵略して来る、この存在を恐れと同時に、ある意味では学ぶ対象とし目指すべき目標としてとらえるという、二重的なとらえ方がアジアには起きたわけです。日本の場合も、このような二重性がありました。しかしながら学ぶ方向に幸か不幸か成功を遂げました。

しかし、多くのアジアはそうはいきませんでした。したがって、そこに方法としての抵抗が現れてくるわけです。問題は、欧米近代がもちろん絶えず高度化する、竹内的に言えば「自己拡張」し続ける、そういう変容を遂げつつ絶えず発展を遂げてきていることは明確です。例えば、19世紀半ばの欧米近代と、今の欧米近代とを比較すれば、その変容は歴然たるものがあります。欧米近代とは、もちろん地政学的な意味で言っているわけではありませぬので、日本なども含みますし、韓国などももはや含まれるわけですが、そういうものが今と150年前とを比べれば大きく変化を遂げていることは明らかです。

しかしながら、その変化の先に、かつて一度は否定された進歩史観、進歩というものを疑うこと



ができないという通念が定着するようになった。欧米近代に対する疑念が1960年代から1970年代半ばまでにはありました。しかし、今日、それは消え去ってきています。進歩そのものを疑うということは、ほぼ息絶えたと言っていいぐらいに、進歩史観は意識の中で潜在化してしまっています。哲学の課題にすらあがってきません。むしろ潜在意識のなかに強固に定着してきているというようにすら思います。

ですから、この半面で言えば、発展を遂げ、高度な変容を遂げた欧米近代化に抵抗するものは確かにすべて敗れるし、むしろ自己破滅を引き起こしてきたという現実があるのです。これが1970年代から2006年まで三十数年間の歴史ではないでしょうか。文化大革命もそうした自己破滅の1つです。あるいは日本の新左翼のヨタヨタと歴史から降りていった、舞台から降りていったというもの——果たしてそこまで言っているのかわかりませんが、それもやはり敗北だったのではないのでしょうか。

そもそも逆らうのは、カンボジアのポル・ポトにせよ、それから今のキューバのカストロにせよ、あるいはリビアのカダフィーにせよ、それから中国の毛沢東にせよ、およそ歴史の舞台から降りていかなければいけない、つまりは敗北を免れないという認識です。そういう世界史的な認識というものが強まってきています。

先ほど、フランシス・フクヤマ (Francis Fukuyama) が自由主義の最終的勝利というもの

を「歴史の終わり？」と書く、あの本のなかで自由主義の世界史的勝利、最終的勝利ということ語ったことを松本さんは言われましたが、あのようなことをわざわざ言ってもらわなくてもいいという感覚が多くの人にはあります。しかし、実際は、あれは、人々が心の底で思っていることを公にただけだと私は思っています。

そうした認識が露骨になることによって現れてくるさまざまなこと、例えば、今のブッシュ政権の自由主義を、世界・地球全体に広げるといったような政治構造として現れてくると辟易とします。だからと言って、自由主義の勝利を疑う人は、このなかに今、世界のなかにいるのだろうかということ私を私は思います。

その意味では、アジア主義が再び問われるときに、そのアジアは、欧米近代に対する抵抗のアジアであるか、と言えば、そうではありません。問題は、そこまで議論をしてみてもう一度戻ってみると、では竹内が問うたもの、それは果たして答えられているのか、解決をしっかりとみているのかという問題があります。

ぐるりと回って、中国でなぜ孫歌さんがこの問題を出すのでしょうか。しかもそれに対して、心の琴線を受け止めるような学者がなぜ中国のなかに登場してくるのでしょうか。中国語では「言葉の境界」と言いますが、中国思想界の一部で言語空間そのものがある思想を軸に変化を遂げようとし始めています。

それは1980年代の「文化熱」と言われたとき、劉再復や李澤厚が定義したときの啓蒙の課題とは明らかに違います。別の質の新しい言葉が、問題を考える手段として登場しつつあるわけです。ですから、先ほどの孫歌さんが話された言葉には、実は言葉に表れたもの以上のインパクトが皆さんにあったと思います。

それは、言葉の境界、言語空間が変わりつつあるということです。その意味では、非常に重要な問題提起が中国でこれからなされることになりま

す。その意味では現時点では日本よりも中国のほうが先行しているというのが私の認識です。さらに、ドイツのほうが日本よりも先行しています。なぜこのようなことになるのでしょうか。日本は、なぜドイツや中国に立ち遅れるのでしょうか。皆さん、中国が高度成長期の日本の真似をし、さらにその先を行くようなモーレツな高度成長の道をばく進しているだけだと思っているかもしれませんが。

しかし、私たちが1960年代から1970年代全般に忘れてきた問題が、今、歴史をまたいで中国にもう一度問われるようになってきているということです。これは忘れてはならない問題であると思っています。さらに、ただ歴史は繰り返すようでいて繰り返しません。私の表題が「無根のナショナリズム」と銘打っているのは、たとえば溝口さんが明らかにしているように辛亥革命もある種の社会的な基盤（根っこ）を持ったナショナリズムの大きな変革によってもたらされたものであるからです。それは確かに魯迅にとって暗黒ではあったかもしれませんが。しかし単に、特定の言説を労するエリートや知識人たちだけの革命であったわけではありません。その背後に社会を変える力量が、例えば、新軍・湘軍と言われるような新たな軍事組織のなかから現れてきて、具体的には郷紳層と言われるような人々が担い手となりました。しかも郷紳層単独で変革ができたのではなく、底辺でそれを支えたのは民間の力だと溝口さんは言われました。

抵抗というものがあるとすれば、もの言わぬ民の力ですね。ですから、言説を労するようなエリートや知識人だけで革命、新たな変革、新しい時代を切り開こうとしても、新しい時代は切り開けるものではありません。

ところが、今はむしろそうではない、むしろ言説を労する人たちのウエートのほうが大きくなってきて、昔、大衆路線、中国語では「チョンジョンルーシエン」、群衆路線と言われたものですが、

何を言っているのだと。「大衆路線なんてちゃんちゃらおかしい」と、「群衆路線なんて何なのだ」という議論が強まっています。ですから今は、「声無き声の会」といったようなものは生まれません。（鶴見「今でも『声なき声の会』は続いているよの声」）

続いているかもしれませんが。ごめんなさい。今、続いているというご指摘がありました。

ただ、かつて声無き声とは、私にとっては非常に大きな存在でした。それから比べるとはるかにウエートが軽くなっているように思います。私は声無き声の一人でありたいと思いつけていたものですから、そういう気持ちが働くわけです。

例えば、戦後竹内は毛沢東に関連して「根拠地の哲学」ということを強調するようになります。竹内は「中国の近代と日本の近代」（のち「近代とは何か」に改題）のなかでも同様なことを言っていますが、抗日戦争を戦う中国の民衆は何を守ろうとして戦っているのかと言えば、それは国家などではないということです。日本人にとって国家は固いものであって、明確に確実にあるものです。

しかし、中国の民にとっては国家はそんなに固いものではないという言い方をします。中国の民衆が守ろうとしているのは国家ではないと言います。国家でないとしたら根拠地を守ろうとしているのです。根拠地とは何なのか、それは人々が生きる「等身大」の社会的基盤です。日々生き、日々生活し、日々生業の営みをおこなう。そういう社会基盤を彼は根拠地と形容します。そこを戦う基盤とする、戦う基盤とするということは、根拠地こそが民衆の命を支える基盤であるという彼の思いがあって、あの文章が書かれるわけです。

私が非常に親しくしたマーク・セルデン（Mark Selden）というアメリカのニュー・レフト（new left：新左翼）の学者がいます。もう一人有名なアメリカの中国研究の大御所のチャルマーズ・ジョンソン（Chalmers Johnson）という学者がいます。

ジョンソンは農民の民族主義 (peasant nationalism) というものこそ革命を支えたと主張しました。具体的に言うと、1937年12月に日本軍の侵攻を受けて国民党が南京から重慶へ逃げたときに、南京を中心とした華中地域がエアール・ポケットになってしまいました。そのエアール・ポケットに住んでいた南京周辺の中国の老百姓 (ラオバイシン) = 庶民たちは、元来はみな南京国民政府を守ろうと戦っていた。その意味で農民民族主義とでも呼べるものが成熟してきていた。ところがその南京国民政府が突然消えていなくなってしまった。そこへ中共の軍事組織の新四軍が入ってきました。そして、新四軍がある種の新しい政権として登場したことによって、あっという間に華中地域一帯の農民民衆の支持を集めることになったという棚ボタ論、つまり国民政府が南京から重慶へ逃げたおかげで、新四軍は棚ボタ的に革命的な基盤を得たという議論です。こうしたジョンソンの議論をセルデンは大変強く批判しました。

セルデンは明らかに竹内的な観点に立った根拠地論を展開したのです。彼が1972年に出版した『延安革命：第三世界解放の原点』(筑摩書房、1976年)を、私は小林弘二さんという方と一緒に翻訳しました。対象とした地域は華中ではなく陝西を中心とした西北地域でしたが、それは文字どおり、中国の農民民衆がどのように根拠地を守ろうとして、村落を中心に抗日戦というものが組織され、戦われたかを論じたものです。

このように抵抗の基盤は、実は日々の生活と生業を支える村落共同体の根拠地的なものを守ること、その根拠地に依拠して戦うことにあった。ここにも竹内に単なる方法としてのアジアではなく、方法としての中国だけでなく、方法というレベルだけではなく、具体相としての抵抗の中国、具体相としての抵抗のアジアというものがあったとすれば、文字どおりそうした根拠地こそが、竹内にとっての具体相の抵抗の基盤と見えた

わけです。

ところで、竹内はなぜ毛沢東に思い入れを深かったのか、なぜ魯迅から毛沢東へと移行していったのかというと、魯迅とは違ってその具体相としての抵抗の基盤としての根拠地に、やはり魯迅に夢を託したように、竹内は夢を託してしまったということです。根拠地から革命が成功し、新しい中華人民共和国も根拠地から成立したもののなのだ、という彼の認識があったわけです。

それゆえに、彼は一貫して毛沢東を支持し、毛沢東に対する一定の信頼も持ち続けた。ただ毛沢東が既に具体相としての国家を体現するようになったと知った時点——もちろんこれは当然わかっていた筈です、そうすれば、竹内は国家というものは中国では固いものではないと見ていたのですから、毛沢東が国家を体現している以上、それもいつか批判されて、いつか覆されて当たり前だという認識にならなければいけなかったはずで

す。しかし、根拠地から立ち上がって現実を見たという革命理解のなかから、毛沢東に対する肯定的評価は容易には崩れませんでした。文化大革命に至っても竹内の毛に対する評価は基本的に変わらなかったと私は思っています。

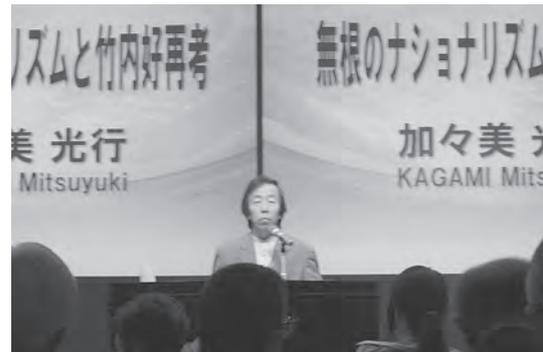
ただし、文化大革命を研究すればすぐにわかるように、文化大革命は根拠地を基盤とするような、いかなる意味でも根拠地を基盤とするような村落再編の変革的な運動ではありませんでした。ただその革命の理念には根拠地革命に相通じるコミュニケーション革命の理念があったことは確かなことです。つまり理念とは別に実践としての文革は明らかに根拠地革命ではなかったということです。しかし、竹内が文化大革命にまで一定の夢を抱いていた可能性は、私は否定できないと思っています。

それはなぜかと言うと、文革が依然欧米近代に対する批判というベクトルは持っていたということがあるからなのです。ただ問題は、具体相に問題を落とすと、文革の中に現われた批判的意識は

もはや欧米近代に対する抵抗を乗り越えて、むしろ勝利の確信の意識の方が支配的だったということが問題となってきます。現実には中国では根拠地革命と竹内好が理解した抵抗の革命が、中華人民共和国の成立によって勝利したからです。問題はそれが本当の勝利だったのかということです。

竹内好の方法は、敗北感の持続と同時に抵抗を持続させることにありました。この抵抗を魯迅の言葉借りて「掙扎」と呼んだわけですが、敗北を常に自覚し続けること、これが決定的に重要で、敗北を忘れるとき、同時に抵抗も忘れるわけで、抵抗を忘れた者はつまりはドレイなわけです。ドレイにならないためにはですから敗北を自覚し続けることが必要になります。そこに「掙扎」の拠点もあるわけです。しかしこれはとんでもない重荷を背負うことです。そういう点からいくと中華人民共和国の成立を毛沢東革命の成功と竹内好が見ていたことは矛盾します。本当は勝利と見えたもののなかに敗北が隠れた形で含まれているということを方法的に、論理必然的に見る視点が当然あってしかるべきでした。しかし、竹内好は中国革命の中の隠された敗北を見ることも語ることもしませんでした。あくまでエールを送りたかったのです。欧米近代に対する抵抗としての毛沢東中国にエールを送りたかったのです。エールを送りたいがために、これを敗北と言えなかったということ。敗北がそのなかに隠されて含まれていることを彼は言えなかったことが、文化大革命に際して沈黙せざるを得なかった一番大きな理由であると思っています。

既に、文化大革命にして根拠地を基盤としないという側面が現れたことからわかるように、今の中国に至っては根拠地革命の要素は皆無です、実は南京大学の社会学の教授で私の友人でもある張玉林さんは「中国の農村は消滅しつつある」とまで言い始めています。農村で自殺者が多発しているのだそうです。とりわけて農村における女性の自殺の比率が極めて高いそうです。それと共に家



族が離散し消滅していくプロセスを歩みつつある。これは、根拠地を抵抗の基盤とする、あるいは日々の生活や生業の基盤に依拠して自分のイノチを支える、そういう暮らしが守り続けられなくなっているということです。

これは中国で高度成長が過激に進んでいるために起きたシンボリック (symbolic) な現象です。何も中国だけにみられるわけではありません。わざわざ世界史的な枠組みでということ、このセッションを世界史の課題として問うているのは、日本を含めて多くの世界でイノチを支える暮らしが崩れてきているということです。

ドイツに行って驚いたのは、ハイデルベルグだけではなく。タウン・コミュニティーが自然と共生する形でしっかりと作り直されてきています。原発の廃止などと結び付いて、エネルギーをどのように扱うかという問題も含めてです。

ドイツの今は根拠地的な人々のイノチを支える基盤としてのタウン・コミュニティーというものを作り直している。そこに新たな可能性を探るような道を見いだそうとしていると見えます。ドイツが竹内好をもう一度再評価するという方向を見いだしているのも、そのためでしょう。

ですから、先ほど松本さんはむしろヨーロッパ主義、つまりアメリカやイギリスとの対抗としてのヨーロッパ主義、英米連合の勢力に対するヨーロッパ主義が竹内好再評価をもたらしているのではと言われましたが、そういう側面は少なくとも外形的には現れています。しかしそれが主要な要因

とは言えないように思います。社会そのものをもう一度つくり替えるという、非常に地道で、しかし強靱な努力がドイツでは重ねられていることが大きいと思っています。

一方、日本ではどうでしょう。この前、秋田県の村でも親殺し子殺しといったような問題が起きています。イノチを守る基盤の一つである家族は、文字どおり急速な勢いで崩壊の方向をたどっています。これは、ずいぶん前から家族の崩壊は問題になっていて、それがまた少子化の問題とも関連しているみたいな議論もありますが。

世界史的に見れば明らかに方向性は、根拠地の崩壊の方向に向かってきています。それは日本、中国にとどまらないアメリカ——それこそ全世界を全部、自由主義と民主主義で覆い尽くそうとしているアメリカのお膝元が最も深刻であると言ってもいいかもしれません。そのようななかで、歴史は繰り返すようでいて繰り返さない。つまり根拠地といったようなものをもう一度語ることは現実的ではない状況になっている。

しかし、同一的な試みの可能性とは残されているはずで、そこへ到達するのは、もちろん中国は、今、猛烈な勢いで高度成長をたどっていますから、農林業の衰退、離農人口の急増、三農問題、公害環境問題などが指摘され、今の趨勢にブレーキをかけようとする指導者の考え方も明らかにされていますが、現在の流れを逆転するほどハンドルを逆に回すところまでは非常に難しいでしょう。

日本に至っては、イノチを守る抵抗の基盤の崩壊についてむしろほとんど意識化されない状態にまでなってきました。つまり何となく無抵抗な、なだらかな意識になってきました。確かに無風状態だと菅さんも言われたし、松本さんも言われました。しかし、取りあえず可能なのは岡山さんが出されたり、あるいは薜毅さんが出されたように内面的な意識の問題として本題をもう一度とらえ返すことでしょう。

しかし、内面的にとらえ返すだけで方向が逆転するわけではありません。あるいは竹内の問いがそれだけで答えられるわけではありません。魯迅が言ったように目を覚まされたドレイに行く道はないのかもしれませんが。私たちはドレイなのかもしれません。しかも行く道がないという状態の真ただ中に置かれています。例えば、岡山さんの問題提起はそのことを明確に示していると思います。

むしろ夢から覚めていないドレイも多いのかもしれませんが。そういう状況下に日本が無風状態と見えること。ここも問題の大きさを示していると思います。

「無根のナショナリズム」とは、こういう無根の状態の、「根なし」と私が言っているのはその意味です。「根」とは、根拠地の根でもあります。「無根」というのはもはや根拠地を持たない、生きるための根拠地というものを持たなくなっているということです。

溝口さんは、辛亥革命に関して少なくとも下からの地方自治というものが根拠地そのものではなかったとしても、それに近いものとして、ある意味では社会的なコミュニティの基盤から起こされたものと評価され、そこに辛亥革命の中国独自の近代化への道を見いだしておられるわけです。

しかし、それも今の中国では大きく瓦解しているわけです。ですから、中国の未来について、連邦制を言ったり、連省自治を言ったりする人も多いわけです。ではその連省自治や連邦制を支えるような地方自治の基盤が、今、中国に危機的なほどに崩壊を遂げつつあるということは否めないのではないかという気もしています。

そうすると、だから昨年（2005年）4月の中国の反日、排日や日本の反中、嫌中をご覧になってください。インターネット上の掲示板が主戦場になっている。日本の場合もっとも典型的なのは「2ちゃんねる」です。

「2ちゃんねる」の妻まじさは、愛知大学の現

代中国学部も好き勝手にののしられています。「現代中国学部」というサイト（書き込み欄）がありまして、そこを読んでいただきたくないですけど、あることないこと書いてあります。ウソもたくさん書いてあります。「なんで今ごろ中国やるのだ、おまえらバカかアホか、ノータリンか」といった罵詈雑言です。ですからこのサイトは見ていただきたくないのです。私が1997年に現代中国学部をつくったのは、彼らから見れば、愚かも愚か、バカもバカ、とんでもないアホだということになります。ですから一部は私に対する罵詈雑言も含まれています。

それ以外にも中国に関するサイトはたくさんあります。いずれも反中のものすごい言葉であふれています。中国のインターネット上の反日サイトもまったく同様です。それで今、政府はインターネット上の反日サイトを抑え始めました。そのおかげで、見るべきものが見られなくなってしまっ

たという負の側面も現れています。

これほど「根無し草」のナショナリズムもないわけですが、それは今日の社会が世界史規模で、欧米近代の道を歩み続けてきた結果でもあります。むろん欧米近代は竹内が述べたように常に「自己拡大、自己拡張」を止めないわけで、その内実も30年前までの竹内の時代から大きく変容を遂げてきている。その線上にインターネット社会も登場しているわけです。そういう状況下に現れてくる「無根のナショナリズム」が、いかに私たちに危険なふちに導いていくか。少なくとも危険なふちに向かっていくこの道だけは逆転させなければいけません。そのために竹内について再考して見ようではないかという思いで、このシンポジウムを企画しました。私の話は少し脱線もありましたが、これで終わります。どうもありがとうございました。